



消化器疾患への アプローチ

著者 大森 啓太郎

東京農工大学大学院農学研究科動物生命科学部門准教授
アジア獣医内科学専門医（内科）

第1回 下痢へのアプローチ：総論

本連載開始にあたり

筆者は二次診療施設で診療しているため、内視鏡検査を行う機会が非常に多い。しかしながら、非常にコスパが悪い検査であると日々感じており、できればやりたくないと思っている（筆者が一次診療を行う動物病院の院長であれば内視鏡は導入しないであろう）。いざ内視鏡検査を実施しても、多くの場合「リンパ球形質細胞性腸炎」という病理診断結果が返ってくるだけで、なぜ腸炎が起こっているのかまでは分からない。したがって筆者は、内視鏡検査を目的にご紹介された症例に対しても、本当に内視鏡検査を実施する必要があるのかを、各種検査を通じて改めて吟味している。一番避けなければならないのは、内視鏡検査

の必要がない疾患、例えば「膵外分泌不全」などに対して内視鏡検査を行い、リンパ球形質細胞性腸炎という病理診断結果に基づいてステロイドを投与し、何かやった気になってしまうことである。筆者の勝手な経験則ではあるが、内視鏡検査を行わずとも診断・治療できる下痢や嘔吐を主訴とする症例は意外に多いと感じている。

そこで本連載では、内視鏡検査の前までに一次診療の動物病院で実施できる消化器疾患のアプローチ法をご紹介していく。本連載の内容だけでは太刀打ちできない症例に出会ったら、自信を持って二次診療施設か内視鏡を持っている消化器が得意な他院をご紹介いただきたい。

はじめに

連載の第一回目は、日常の診療現場で遭遇する頻度が高い「下痢」に対する診断アプローチ法を解説する。私はフローチャート形式の診断アプローチが嫌

いなので（覚えられない）、私が日々の診療で着目しているポイントをご紹介しながら下痢の診断アプローチ法を概説していきたい。

下痢に対する検査のポイント

問診と身体検査のポイント

下痢の症例に遭遇すると、どうしても消化管の異常を探りたくなるものである。しかしながら、表1に示すように、下痢の原因は消化管以外にも多岐に

渡る。そのため、問診および身体検査では、消化管以外の原因にも目を配りながら、下痢の原因となり得る情報を聴取し検査していく必要がある。特に直腸検査は重要で、結直腸の狭窄や腫瘍の確認（犬では